

CINEX Web Journal



第 5 号

発行日 2018 年 12 月 1 日

- | | |
|------------------------------|-------|
| ★ 小学校段階から必修化となるプログラミング教育について | 中村 真二 |
| ★ 留学生が日本語を話さない理由 | 田村 敏広 |
| ★ 「あの世」はどこに？ | 村上晶 |

小学校段階から必修化となるプログラミング教育について

静岡県立島田商業高等学校 中村真二

2018年3月高等学校の新学習指導要領が公示され、現在、各県において新学習指導要領の改訂内容を周知・徹底するための説明会が行われている。すでに2017年3月には小・

中学校の新学習指導要領も公示されており、いよいよ 2020 年、小学校から始まる新しい教育の本格的な準備段階に入った。特に小学校においては英語の教科化だけでなく、プログラミング教育が必修化されるとあって、その対応が注目されている。

文部科学省は小学校におけるプログラミング教育の円滑な実施に向けて、「小学校プログラミング教育の手引」を発行した。手引はプログラミング教育についての基本的な考え方などを解説し、教師がプログラミング教育に対して抱いている不安を解消し、安心して取り組めるようにすることをねらいとしている。

なぜ小学校段階からプログラミング教育を導入するのか。手引にはその理由が次のように述べられている。「今日、あらゆる活動においてもたらされる情報を適切に選択・活用して問題を解決していくことが不可欠な社会が到来しつつある。情報を適切、効果的に活用していくためには、その仕組みを知ることが重要である。コンピュータは人が命令を与えることによって動作する。プログラミングによって、コンピュータに自分が求める動作をさせることができることを知ることで、より主体的にコンピュータを活用することにつながる。(手引の内容を要約)」

プログラミング教育必修化の動きは世界的な傾向で、すでに海外では多くの国で取り組まれており、日本は先進国の中で最も遅れていると言えるだろう。

2013 年、アメリカのオバマ大統領は、国民に対して「ビデオゲームを買う代わりに、自分で作ってみよう。最近のアプリをダウンロードする代わりに、デザインしてみよう。プログラミングを学ぶことはあなたの未来のためだけじゃない。国の将来がかかっているのだ。」と呼びかけ、2016 年にはコンピュータサイエンス教育に総額 50 億ドル（約 5000 億円）もの投資を表明している。

日本の子どもたちがコンピュータに使われるのではなく、その仕組みに興味をいだき、主体的に情報を活用できる能力を身に付けることができるかどうか。日本政府、教員の真剣な取り組みを期待したい。

留学生が日本語を話さない理由

静岡大学 田村敏広

この10月より、私の研究室にインドネシアからの留学生が来た。彼は母国の大学の日本語学科を卒業したこともあり、日本語力は決して低くはない。日本人学生とも日本語でやり取りを行い、コンビニでアルバイトをし、日常生活に支障のない日本語力を備えている。しかし、彼は私とは日本語を介したやり取りを好まない。基本的には全て英語でやり取りすることを希望しているのである。理由を尋ねたところ、上下関係を意識すべき場面では、呼称や丁寧体や美化語を含む敬語表現等などを正しく使えないがゆえに相手に失礼になってしまうのが怖いからだそうだ。

このように呼称や敬語習得の未熟さがゆえに目上の人との日本語を介したコミュニケーションを避けたがることは、日本語をある程度まで習得した日本語学習者の多くに見られる傾向である。日本語学習者は初級段階で、「私」という自称詞や「です・ます」による文末体、簡単な敬語表現を用いるが、あくまで形式的な学習を基にした使用であり、背後にある使用のメカニズムとは結びついていない。しかし、語学学校等の学習環境外で日本人と触れ合うなど、日本社会・文化内での言語経験が増えるにつれ、日本語の呼称や敬語表現の使用は形式的習得では不十分で、文化的側面の習得が必要になることを知るのである。日本語の呼称や敬語表現の使い分けは、「ウチ・ソト（・ヨソ）」という、人間関係の切り分け方を示す概念によって説明されることが多い。当然ながら、人間関係の切り分け方には文化的固有性があり、異文化間で大きく異なる。興味深いのは、ウチソトが使用に強く影響を及ぼす言語も多いことである。そして日本語は、学習者からすると厄介なことに、呼称や敬語表現など、ウチソトと言語使用の結びつきが強いタイプの言語なのである。

インドネシアからの留学生に話を戻すと、彼はまさにこの言語文化的相違に直面している段階なのであろう。今後、彼がこの言語文化的相違を克服し、私と日本語でコミュニケーションを取ってくれる日が来ることを楽しみにしている。

「あの世」はどこに？

白百合女子大学ほか非常勤講師 村上晶

近年、死と死をめぐる人々の営みについて考える機会が多くなった。それは第一に、「弔い」をテーマとした宗教史の講義を大学で受け持っているためであるが、より個人的な体験としては義母の看取りのために緩和ケア病棟で多く時間を過ごしていたことにもよる。筆者の専門は宗教社会学であり、日本のシャーマニズムについて研究している。周知のとおり巫者（シャーマン）たちの実践も、死者と関わることの多いものであり、ここでもやはり死の問題は避けては通れない。

死後の世界に関して、人間は多くの思考をめぐらせてきた。それは神話であったり、各宗教の教義であったり、「民間伝承」であったりするのだが、興味深いことに「あの世」への入り口として地上の実際の地点が名指されることがある。例えば、現世と黄泉の国の境として『古事記』に登場する黄泉平坂は、島根県松江市にあるとされている。また、ヨーロッパに目を向けてみると、中世の修道士が記した『聖パトリキウスの煉獄譚』では、アイルランドに実在する洞窟が煉獄の所在であるとされ、この煉獄を垣間見ようと多くの巡礼者がこの地を訪れた。洋の東西を問わず、どうやら人間は神話や教義をこの世と全く別次元に属する抽象的なものとしてのみとどめておくことは苦手なようである。先の例のように、神話的世界観や出来事を現実の地図の上に重ね合わせて表象する行為が頻繁に行われてきた。近年では「神話の里」など「町おこし」としての商業的動機に基づくものも目立ってきたが、それが商業的に価値を持つということは、宗教的な物語の魅力が未だ顕在であることを物語る。いずれにせよ、黄泉の国や煉獄の入り口が生者でもアクセス可能なこの地上にあると考えることは、死後の世界もまた現世の延長線上にあるということである。そうして死後の世界に物理的な近さの感覚をもつことは、未知なるものとしての死への恐怖を多少なりとも和らげてくれるものであるのかもしれない。